

関門海峡

阿山勇祐

まえがき

関門海峡を、書くに当り、名所、旧跡の紹介にとどまらず、スケッチを行った場所、又描けそうな場所も書き入れた。図工や、絵画製作の面からも考えたい。ポエジヤ、ポエムは心の糧とし、芸術的な教養を高めたい。スケッチや、制作により、技術に於て、職人的な立場も、高揚したい。

晩秋

引き潮の、流れが、一番激しい時である。大きい渦を巻いて流れる潮、白波が鋸の歯の様に、立っては消える。流れに逆らって進む、小型の油送船は、上甲板を、波が洗っている。船は8ノットの流れを受けて、グングン進んで行く。今の時代だなど思う。すこし前までは、この流れを乗り切れない船は、和布刈のはなで、潮の变りを待っていた。壇之浦砲台跡の碑を後に、私は海岸側の斜面に坐っている。ここは早鞆の瀬戸である。ピンとこないだろうが、源平合戦の絵舞台である。源氏は干潮をこらえて、東より西へ流れる、満潮に乗った。満ち潮に、ウンがついた。向う門司側は、和布刈のはなで、赤い小型の燈台があり、後は古城山である。前は潮の流れと、いききの船である。6号Dの画面に、無暗に押し込むと、信玄袋から、ぼろが、はみ出した様になる。

じっと見ていると、冷気が、身にせまってくる。中央の、ひしめき立って流れるところから、描きはじめる。向うの山を描く、船を入れる、仕上げに取りかかる。

ほっとして、左側を見れば、「平家の一杯水」が見える。これだけ流れたら、平家の一杯水も飲めるだろう。

家に帰って絵を見ると、渦巻と白波が、目立ちすぎる。デフォルメが過ぎた。雄大さ、質感、整理すべきタッチ等、多くのものを、抱いている。

再度出かけたが、干潮とずれが出てくる。

初冬

御裳川公園は、人道入口の横である。御裳川は小さな川で、それに朱塗のらんかんのある橋がかかっている。土佐の高知の、播磨屋橋と、好一對だろう。交通量の多い所、朱塗のらんかん、小さい等、速度のある車は、見落すだろう。

安徳帝の……波の底にも都ありとは、を思う。今、北九州市と、下関市を結ぶ、海底自動車専用道路と、海底人道がある。地上には、関門橋がある。何れも、科学の粋を集めて、出来あがったものである。

関門橋の車の速度を、無制限とすれば、地球の自転速度より、車の速度が大になり、地球外に投げ出されるにちがいない。こんな話は、シュールにまかせよう。

御裳川公園より見て、南前面が、和布刈神社である。その西へ旧門司、更に西へ発展した門司、その後が、なまこ状の山で西の極まる所が、風師山である。

ここは700 mのせまい海峡だから、下関側の要所に、浮標燈台がある。にし明りの黄味がかった、雰囲気で、海峡がつつまれている。

4号Fに描く。絵具はうすめに、黄から、黄土に、門司の山々は青黒く、調子をつける。浮標燈台は、細部まで説明した。

さて、関門橋は絵になるか。

はじめ頃は、見物人も多く、スケッチをする人も多かった。

人にまけない様に、ワトソン紙を、4号F大に切って、鉛筆と消ゴムを持って、描きに行った。小さな紙に描くので、細工的な、説明で、時間を取った。力学的な要素を考えて描けば、そのものの良さも出て来る。うるさく思ったが、面白く描くことが出来た。と話したら、新聞にさっそく出された。油絵も描きに行った。緑の時より、草が黄味になった方が、海の青と対比して面白い。

冬 1

農民一揆の様な、いでたちをした、総勢30余名は、手に手に提灯を持ち、竹籠を背負っている。竹籠の中は、小豆の握り飯二つ、めざし二つ、を竹の皮に包んだものである。残りは僅かで、寒施行も、終りに近い。静まりかえった、伊崎の道を、小門の笠森稲荷へと歩いている。

家と家との、ときれた所から、見えるのは、小瀬戸の満ち潮である。流れる、滑かに流れる。重なり合い、広がり、渦巻き、吸い込まれて、音も無く湧き出て来る。三日月が澄んだ空にかかって、彦島は黒々と息づいている。赤間宮のお旅所附近に来ると、視界が開けて、小瀬戸は一目に見渡せる。波の面は、一層輝きを増している。対岸は身投げ地蔵あたり、恐怖感と、寒さは一度にせまって来た。子供の頃の思出である。

冬 2

和布刈より、下関を描く。

唐戸でバスに乗る。赤間神宮前、壇之浦、次は人道入口である。門司側に通じる、海底人道トンネルの場所である。

昔は10円払って、運転手づきで、立坑を40m位降りる。すると海底部の、700余mが待っている。今でも従来の深さに、変りはない。無賃で自分でボタンを押して、降りるのが変った。

1月の寒い時でも、トンネル内にはいれば、寒さは、まあよろしい。

海岸に、和布刈神社の小さな建物がある。冬のスケッチは先ず風ふさぎである。眼下は流れが早く、小渦があって、透明なうす緑である。すぐ上の関門橋のかけが、水面に紫色にうつり妙味がある。

向うは壇之浦、赤間宮の水天門は見えない。隣の春帆樓の黄色い瓦は華やかである。岬、彦島と西側につづいて見える。

6号Dを持って来た。下関より見る門司は、後の山が高い。門司より、下関を見ると、山が低く、山の上まで家があり、見当が違ふ。

私は、吉祥寺にいる時、西萩の、栗原信氏を訪問した。其の時スケッチについての話が出た。箱根の气象台の所より、東に向って双子山が描ける。西に向って一枚描ける。それ以来、一ヶ所で二枚描ける処を、探している。海底人道トンネルは、幾度も通る。門司側を離れて、下関へ近くなる。m数も読め、山口県と福岡県の県境も見えて楽しい。

冬 3

大寒になったので、忘ノ宮にスケッチに行った。

下女短大附属高校の2年生が通りかかった。

先生、この寒いのに何しに来たの。

絵を描きに来た。寒をあじわいに来た。

はあー、とんきょうな声を出して、行ってしまった。

長府の浜に出ると、ぼたん雪になった。5人ばかりの仲間の一人が、近づいて来た。

わしら山の中から、魚を釣りに、来たんじゃが、どこがよく釣れるか、教えてくれんか。

私は釣りに、来たんではない。

この寒いのに、何しに来たんか。

絵を、描きに来たんじゃ。

男は、だまって、帰って行った。

ぼたん雪が降っている。

あたりはうすぐらい。

赤味の花崗岩が、雪をかぶっている。

門司の山は、うっすら見える。

男達は、たき火を、囲んでいる。

一人の男は、むれに帰って行く。

何かのモチーフに、なるだろう。

晩 冬

長府の、しき紙を描いてくれと頼まれた。

年中行事も考えねばなるまいが、先ず出かけることである。満珠、干珠の見える三軒家に出かけた。今日は、釣人のかげもない。花崗岩の、出っぼなを出た所で、T高校のA先生に出会った。

縄ばりに、やって来たな。

毎度のことで。

スケッチのじゃまに、ならない様に別れた。

早 春 1

たびがしたいな、と思う時唐戸まで歩いて出る。唐戸の渡しで、滞船を見ながら、門司へ行く。門司では、目抜き通りを、時間をかけて歩く。チンチン電車に乗ると、海峡を北側に見ながら小倉に着く。繁華街を、道行く人々の足並みに合わせて、ぞろ、ぞろぞろ、と歩く。小倉より汽車に乗る。又海峡が北側に見える。門司より、海底トンネルである。下関駅近くは港、バスで我が家へ帰る。ねたも拾える、旅の気持を満喫できる。

早 春 2

長府に梅の名所を知らないか。

あるよ、笑山寺さ。

行ってみると、幹に大枝を、わずか残して全部切っている。ミロのビーナスは、体の曲線に対し、腕の切断で、色気が出るという。然し、梅の木は無残である。改めて梅花笑む頃、恐れながら行った。幹からのシュート、花のつく枝等はじめて意識してみた。理科的観察と同時に、絵画的観察も出来た。梅花見物の客のなかったため、有難き幸せと言いたい。

梅林の横を流れる、壇貝川は2km余りで海峡に注いでいる。

春

門司港へ、たくさん汽船がとまっているので、門司へ渡る。汽船の重なり合い、向きが刻々変化して面白い。私はこれを残像の重なりと言っている。

国立公園をバスで走る。ほんとにすてきである。

もう一つおきかえて、電車バスの上から、たねになりそうだ、面白い、と思う所へ、わざわざ

ざ行ってみると、平凡である。つまり、残像の消えない時、次の風景を見る。重なりがより美しく感じさせる。

晩 春 1

長府の忌ノ宮神社の話である。夏になったら祭か。今年の祭りはだらしのうと思うた。又相談もした。昭和22年頃の話である。戦争中はりきっている時は、物はなくても、祭りはつづけた。今は精神的にがっかりきている。物も不十分である。ところが、初夏にかかった頃から、夢にワッショ、ワッショの掛声と祭ばやしが増えてくる。気にはなるがそっとしておく、ワッショ、ワッショは日ましに大きくなる。相談した相手に、ワッショの話をする、わしもそうじゃ、神様の催促だろう、じゃ今年は景気よくやろうと、相談した日より、ワッショは聞え無くなった。忌ノ宮の鬼石も変わったことはない。沖に浮ぶ満珠も干珠も、変わったことはない。海の水も普通に、満潮と干潮を、繰り返している。天変地異なく、今年の数方庭祭もつつがなく終わった。靈験あらたかな神である。

メデタシ、メデタシ。

晩 春 2

個展をやれと、すすめられた。関門海峡は、思出に残るモチーフだから、買い手がつくよ。家より日相山まで15分である。4号Fを2枚持って行く。1枚は明るいうちに、描き上げた。私の描き方は早い方である。2枚目は薄暮になる。だんだん細部が除かれて、大きい、マッスになってくる。夕方特有の赤味も出て、詩情あふれるものとなった。6月になると、保育科1年の学生に、新緑を描かせる。それに人物を入れることにしている。そのモチーフをゴツゴツ探す学生には、早く決断を、くだせという。ボエジを養うために、短歌、俳句、や詩を読めと進める。

私自身は絵の中に、情緒的なものを、もり込もうとは、思っていない。

素人向きの、甘さや、味っぼさはない。

初 夏 1

門司のビール工場で、ビール祭りをやるので、行かないかと誘いがかった。工場の見学、ビール1本サービスする、くじ引きもある。私はよろこんで、行くことにした。

工場側は工程の説明をしながら、見学させる。さて、ビールのサービス場所は、海のすぐそばである。出船千艘、入船千艘である。形、色、速度、船首の白波の種々を、目の前に見た。ただうっとりとながめた。ビールの味は、上等だった。

初夏 2

或る朝のこと、日和山公園より、もやの中に門司の山を見た。

うす灰味のウルトラマリンである。

大陸から来たお客さんは、河と思った関門海峡は、乳白色である。

空はうっすらと黄土調に光っている。

下関側は、百貨店の一部を入れると豪華な構図になる。

80号のPにしよう。経済的に、この巻を買うことにしていた。幾枚ものPを描けば、おのずとPの構図が見えるものである。又Pの構図しか見当らない狭さも感じる。

この絵は今残っていない。ボエジーだけで、おいた方が良かったかと思う。じみな群青と乳白色、それに透過光線の黄土調の空、期待ほどでもなかった。淡い拡がりはあるが、アクセントがない。10号位なら画面がもてただろう。

後年、田植休みを利用して、出雲地方へ旅行した。日の御崎で、うみねこの乱舞を見た。80号Pの画面にこれを入れたらと思った。又海上のもやを通して滞船と走る船を入れて、下関と門司との、空間的な連けいを考えた。

柳亮氏の主宰する黎明会で、桂離宮の天の橋立の話聞いた。2 m位の処に餅大の平たい石を並べる。すると目は、その石一つ一つを追って行く、やがて小さな燈籠へ行き着く。つまり短い距離を長く感じさせる。

下関側の百貨店を起点として、海に三隻の船を配置する、門司のかざし山の突出部へつながりを持たせる。関門海峡を書くについて、思い出されたことである。

初夏 3

夕方の干潮時、唐戸魚市場の岸壁である。前面は、防波堤で内側は静かな水面である。防波堤を越して見える海は、流動している。そのすぐ先が、関門海峡の一等航路である。門司港駅の後には、三角形の山で、左右に山がつかっている。

8号F 1枚は汽船を入れて七分程描いた。仕上げは後日にする。時によっては三回に描き上げることがある。

8号Fの2枚目は、だんだんと暮れかかってくる。グレー味の青白い感じになるので、白を大筆でたっぷり塗り込む。その瞬間感じが変わる。又白を入れる。しばらく追いかけてこをした。手もとがしだいに暗くなったので中止した。明るい時には形があり、色があったが、漸次青白く変化して来た。完成したかに見え、未完成の様でもある。

夏 1

火の山で2泊3日の、ボーイ、スカウトの訓練を行った。

火の山の頂上より、市内を見下ろすと、うす暗い中に電燈がついている。太陽は中天にかかって、輝いているのに。

第2日目も、第一夜と同様、中天に太陽は輝いているのに、下界は漸次、暗につつまれた。海峽もようやく、夜の色に変わっていった。

夏 2

亀山林間学校。

8月1日より8月10日まで。

6時30分ラジオ体操。

7時—8時。

日替りで次の行事を行う。

図画及び習字。七夕の話。交通教室。

お話し。手品。

昭和58年度は創立32年目である。昨年は、満30年間奉仕した者が、山口県神社連合より表彰された。普通はやめる前に表彰される。私も老年になったので、若い者と交替しようと申出た。ここでは続けてやって貰うために表彰する、だからすぐやめる者があるかと云われて今日も喜んで参加している。6時に家を出て、歩いて30分亀山神社に着く。久しぶりに体操すると、ふしぶしがボキボキいう、終り頃にはなれてきた。やっぱり参加することが、いいことだなと思う。

はじめ頃は、高校より園児まで多かった。近年は、小学生と園児が多い。

おぼあさんに、付き添われた男の子に、面白いかい、と問えば、図画描くの、なんぎで、なんぎでいけん。上手に描いているよ。うーん、そうかな。

教育ママと来た少女、

昔風にクレパスを、コッチリ塗り込んだ絵を持って来た。

ここの色が重いので、けずってのけてと、説明した。又持って来たが、直してない。先生が描いても良いかと問うと、うんと答えた。色をとって、バット直した。少女はそのまま向うへ持って行った。後で聞くと、先生が直したと泣きしていたという。

この型の子は案外といる、直すと消ゴムですぐ消してしまう。わがままか、排他的だと思う。それとも自分が描いたところと、先生が描いたところは、感度や、技術の違いが、本能的にわかって消すのかな。

近頃の子供は、動物辞典の様に、細やかに描いている。クレヨンで色がつくかいといっても、うんとか、知らん顔をしている。

図画は感性を養うものである。疲れたら休んで、神経の休養をして描けば良い。疲れたまま、休みもしないで、頑張れとむち打つことは、精神異常を育て上げることである。又図画が嫌になる、一つの要素にもなりかねない。疲れも知らずに、長時間描けることは正常ではない。

どこを描こうかなと迷っている子供は、目の前の船と海か、家か、下に見える魚市場か、写生をしている子供か、としぼっていく。

又の方法として、色のたくさんあるところを示す、家のかたまりを見ると灰味の赤、白灰味の黄土、新しいクリーム色、こい緑の屋根等を話すと、なる程描けると、うなずく子供もいる。そして決定線へと導く。

どう描くか、と聞かれたら、くちで説明する。わからなければ、スケッチブックに描いてみせる。

色の話になったら、塗ってみせる。水の含ませ方、重ね方、そのあたりで描いてゆく。

桜マットの様な、絵具の使い方のわからない、つまり基礎知識の乏しい親は、そばで助言しない方がよい。

学生が幼稚園実習に行って、指導しない方が良いと、注意されたという。お前は基礎知識が出来てないので、指導するなの意味にとれば、はずかしい話である。

少々知っているので、ギャア、ギャア言ってみる、指導教諭はうるさいので、だまって描かせよの意味であったかも知れない。

指導するなは、日本の反語として指導せよも取れる、何を教えて、何時だまって描かせるか。そこで一般的な指導体系を確立する必要がある。それを組みかえて、どの様に指導するかは、個人差による。

ごく簡単にいえば、アイデアの指導、技術の指導、を何れを先にし、何れを後にするか、子供の状態により今が良いか、もうすこし先が良いか、子供と先生の相関関係である。

ぼくは、何年生かい。

絵の中の、おもしろいところは、どこかな、主になるものは何かな。

色の塗り方等たずねてゆくと、見当もついて来る。考え方技術面の指導もできる。一気に、こう描いた方がよいと言っても、平気な顔をしている。何時もやっていることが、一番良いことだと思っている。

気ながに話していると、子供も、こちらを理解してくれる。つまりこちらが、先生づらをして子供を見ていると、子供は子供なりに先生を観察している。悪人では無いようである。信頼出来そうだが、人相の良くない白髪先生だな。

今年指導に当たったのは3人である。少数の子供は、つかず、はなれずという対人関係を保っている。今年はその先生に見てもらおうと、きめている子供もいる。私のすぐ傍にいる子供が、向うの先生に持って行く。わざわざ探して、私の所へ持って来る子供もいる。こんなのが、う

まが合うというんだらう。

5年の男子で、石燈籠を細かく描いていた。人物を入れないうん、記憶では描けない。モデルの子供を、坐らしたら描いた。視覚型であろう。着彩になると全くわるい。にごって、こげついている。

これを評して、次の様にいいたい。

大根はよく煮えた。味つけが悪いのでチットもうまくない。

保育料の学生には、時間の配分を考えよという。

芸術作品を作るのに、制限するのがおかしい。遠州の様に、金を惜しむな、催促するの方が良いという指導者もあるだらう。そこら当りは、指導精神にまかせるとしよう。

6年生の女、丈が高くやせ型、普通、特別変わった感じはしない。

前面には、合板一枚分に、全面絵馬がさがっている。絵馬をクレヨンでゴシゴシと描いている。先に地を塗れば良いと云えば、水彩絵具を持参していた。はじき絵を心得ていた。

向うでは、父親と小学1年生位の男の子と、何かもめている。近寄ってみると。

子供　今日は帰る。

父親　もうすこし。時間がある。仕上げよう。

先生　ま位、描けている。

あす仕上げるか。

子供　うん。

父親　では、先生と。約束の握手をして。……あす描き上げるな。

父親は、何か、しょうこを残すことが大事だと思っている。子供は度々、約束を守らないんだらう。

夏 3

本学も、夏の休みになって、集中講義を行い、最後の日に、夏の夜を、楽しむ催しがある。すこし早いな、と思われる頃、唐戸棧橋より、納涼船に乗り込む。火の山、を見上げて、早鞆の瀬戸をよぎり、満珠、下珠島に近まれば、潮みちる珠と、潮ひる珠の話を学生に話す。

この当りで、船先をまわすと、冬場はかれいの釣場であると説明する。再び早鞆の瀬戸を通り、左手に相布刈神社を拝する。正月の初め、夜中のわかめ刈の話をする。関門海峡二等航路あたりを通る頃には、下関も、門司も目のかげった感じになる。船島（巖流島）を右に見、延命寺のはなを左に見て、白州の燈台を右に見る頃には、学生達の顔に、うす闇がかかる。ここで昔の小学校の本に出ていた話をする。この附近は船の往來の激しい処で、しかも沖に浅瀬があり、難破船も多かった。それで白州の燈台を作ることになった。工事が進行すると、これを、こわしに来る悪い人達がいた。長い年月をかけて完成した。

船内の提灯に火がはいった。モールは提灯を結び、納涼気分があふれて来る。喜びが一杯の顔、顔、納涼の時間帯にはいった。若戸大橋より、洞海湾にはいった所が、西の折り返し点である。水にうつる燈火は、大きな波のうねりに乗り、風の吹くさまに千々に砕け、絶え間ない変化を繰り返す。あたりは、すべて、やみの中である。浮き上る赤、黄、橙と緑などが入りまじり、南国情緒として受けとめられる。倉庫の並ぶ地帯で、湧き出る海水に、青い光が当れば、大冷泉を発見したかの様に、かん声を上げる。

折り重なって交錯する車の光りに、高らかな歌声が流れる。沈黙の学生は、故郷の港の燈火として回想しているのか。先生と語る学生達の華やいだ笑声は、夜のやみに、こだまする。

ねー南部よ、ほら唐戸よと、いう間もなく、棧橋に降り立った。出発の時が、しらけた昼間だったが、今は夜の闇と、これを美化する、青、橙の燈火に、うっとりとした空気に包まれている。あー、私まだ船に乗ってるみたい。これが最後の納涼船だった。

ナターシャの最後のシーンを思い出す。

お芝居は終わった。みんなお帰り。

夏 4

和布刈燈台の、裏山より、火の山を描く。これは富士山型の小柄の山である。山上には噴火口はないが、北側の山麓の藤ヶ谷では火山弾と皿石を拾った話がある。折にふれ姉も皿石らしきものを拾って、私に見せてくれた。何んでも、とびつきたい年頃には、趣味のいい先生に、受け持ってもらおうといい。

蟬のなく、ねむたくなる様な時に、山頂より、もくもくと黒い煙があがる。しばらくすると、障子がピリピリと動く、重い発射音が聞えた。借馬の我が家から火の山は、目の前にある。戦争になったら、どうしようと子供心に話し合った。火の山も20年余り見ていると、晴天の時は小さくはっきり見える。雨天の時は、大きくぼーと見えることを発見した。

その昔は、スケッチをしてはいけない山であった。描いたり、写真にとると国賊の様に考えられた。宗教的な聖なる山でなく、法的にせいなる山である。

それを門司側より、堂々と描くのだから、気おいたたずにはおられない。山の半分以上には、古い木がもくもくと茂っている。6号Fだから、大筆でやれば、一塗りであるが、茂る大樹を、描こうとすれば説明的になり、268mの小山だが、景感が不足する。10号位、持って来ればと思うが、個展の小品が描きたいのである。

夏 5

8月の終り頃に、創元会山口県支部展を開くことにしている。火の山を、北側より、100号Fに描くことにした。計画的な準備ではない。描くうちに100号になってしまった。

権現山の南端を、内目上水の、鉄管が通っている。ここより8号Fに火の山と、菜の花を描いた。同じ場所から、次の年も、10号Fで、菜の花と、火の山を描いた、両者は山のボリュームが出る様に、度々補筆した。前景の標野は、火の山の北部に当り、中国縦貫自動車道の、インター、チェンジになっている。国道2号線を主軸にすると、九州方面へ、橋と、海底トンネル、北浦へ196号線、市内の各方面へ分かれる。高低相交り合いながら、背面の火の山と相對している。

火の山を、北側より見ると、白々と逆光線の位置になる。菜の花の頃には、ウルトラマリンがかっている。

東側の前田より、菜の花の頃描いた。この時もウルトラじみていた。

中目のキャンパスを準備する。ブタ毛の大筆に油を少なめに、絵具をたっぷりつけて、たたきつける様に描いた。早く仕上げる予定で、次の日もつづいて描いていった。

仲間の間では評判はよかった。

晩 夏

門司の住人である高校教師は、裏門司に行くと、石切場の跡が長く続いている。人もいない、鳥もいない、すずきが立って、荒涼たる感じがする。言葉につられて行ってみた。

門司ー白野江ー吉江とバス停がある。なるほど、廃墟になった石切場は淋しい。動くもの、私、波、雲だけ、特にさびついた機材は動きと、うらはらに一層シーンとする。進むと、大きい看板が出ている。この附近は梅花石を産する。それだけ読んで、そこらを探したがない。この奥に坑があって、其處から掘り出している。梅花石を含んだ部分は、捨ててない。

岬を曲って部崎（へさき）の燈台へ登った。小犬が、じゃれついて描けない、困っていたら、事務所員が部屋に入れてくれた。

捨て犬でしてね。クワンクワン鳴くので残飯をやる。そして住みついている。人が来るとよろこぶんです。

白い燈台と海、はるかに小野田市の岬が見える。8号Fに描く。白い燈台は、キャンパスの地を残す。海は厚目にコバルトをつけた。白が出ないで、海がとび出してくる。あわててナイフでけずり取る。でも白は出ない。筆でねりまわすうちに、コバルトが落ちて、白が出てきた。今まで経験しなかったことである。テクニックを発見した絵は、取っておくことにしている。

初 秋

彦島の本村小学校に勤めていた時である。台風が来るので、児童は正午頃帰宅させた。

風浪を見に行こうと、竹の子島に行った。べたなぎ、であった。帰りは大雨で、しんまで濡れた。風浪の激しいのは、小学校の前であった。下関ー門司間はもちろん、下関ー彦島の2km

間も欠航となった。はじめてのことである。一泊した。

秋

幽霊祭のある、寺の山へ登る。

日没1時間前より、

12号F、

積雲が門司の山の上にある、

天気はよろしい、

スケッチがあるので12号Fの寸法に引きのぼして、下絵を描いた。

普通其の場で、初めから描くのであるが、時間の都合もあるので、描きはじめより楽である。油を使って、一応全面に着彩する。小細工はしないで、日没まで見る。

5日位たつと天気も良いし、出かける。今日は、任上げるつもりである。特に海の青味緑味に注意したい。秋の日没前の海である。赤、赤とした夕焼でないことを折る。

U君は、この絵は売らんことですか、と常にいつている。

再びめぐり来る晩秋

やせおね、の表紙に関門橋を描いた。N君は人道にいる人物を指して、これがあるから橋が雄大になると、さかんに言っていた。

再びめぐり来る初冬

風邪がみであるが、旧駅裏の船溜りの棧橋に出かけた。何回も行って、知っている所である。然し折々の微妙な動きは、計り知れない。今日は海峡の西口の方が、船があり雲があり面白かった。

再びめぐり来る冬

北九州市の東より、門司の風師山、小倉の帆柱山、八幡の皿倉山と、北側の斜面に、残雪がある。早く描かないと、解けてしまう、早く早くと、自身をせきたてるが、仲々乗って来ない。私は毎日の、習いとしていることは、朝、登校する時は、其の日の授業、のことを考える。

帰りは、今日帰って描く絵の、手順を考える。伊豆大島のS、Mを5枚順に描こうと。

再びめぐり来る晩冬

唐戸グランドホテルの7階で、ならび会の会合を行った。まどを、パイロットが涙しぶきを上げて走っている。曇天の空の下、引き潮は重たい。面白いが、絵にならない。

再びめぐり来る早春

うららかな日、下関駅前の大歳神社に上って海峽をながめる。120段はあるだろう石段を上るつらさより、深しみの方が大きい、日没前で、門司側の海の色が鮮やかである。近來高層建築物が、立ち並んで、海がだんだん、せばめられてゆく。

再びめぐり来る春

岬町の船溜りの、白いマストの群はようやく、かげろうに燃えようとしている。
白いマストの重なり、黒い色、青い色の船体に、赤塗の船もまじっている。
前から描いてみようかなと、思うだけで、手をつけてない。

再びめぐり来る晩春

竹の子島と、彦島間を結ぶ50m位の橋の上より、足下の海を見る。
昔2銭の、舟賃だった頃より、鮮さは落ちた。然しまだまだきれいである。

再びめぐり来る初夏

引き潮で、壘ノ浦燈台のわきに、3,000tはあるだろう大きい船が座礁している。満潮までば、浮くさ。

再びめぐり来る夏

T 司法書士は、羽織袴で、奥小路まで来た。
知人 どこへ。
T 盆礼に行く。
知人 持ち物を、じろりと見て
壘ノ浦だろう。
見破られたTは、羽織袴をたたんで、釣に行った。漫画だ。

再びめぐり来る晩夏

関門風物詩と、思われるものは、下関駅—門司港駅間を結ぶ500t位の、二階づくりの白い連絡船だろう。
15分かかる、船室は広いし、晴れやかであった。
事件が発生した。
1人の紳士に、モダンガールが話しかけた。紳士は煙草をすすめられて、これを吸うてねもってしまった。
紳士の、大金を持ってドロシたらしい。足跡も、イエライシヤンの香りもなかった。

再びめぐり来る初秋

釣りの好きな兄のお伴で唐戸の岸壁へ釣りに行った。小鯛を一匹釣り上げると、子供等が、わあー、といて寄って来た。どこから来たかと聞けば、あそこの蔭で見っていた。このさわぎは、地方新聞の記事にもならなかった。

再びめぐり来る秋

九州の呼子の方より出た船が、角島あたりまで行った。そこで、あわてた。関門海峡はどこだっけ。それは大阪方面に行く船だった。私は韓国へ船で行った。海峡を出て、しばらくたつて、ふり返って見たが、見当がつかかねた。

後 が き

私は5才の時、岩国より下関へ移り住んだ。冬はシベリヤ下ろし、夏は瀬戸内の東風を吸って成長した。海峡の見える宮崎山と原山でスカンボや、つばなを食べた。茅を切って、しんをとばし、おどりこ草の葉をならした。今考えれば、海峡は見えるが、心にとめることはなかった。

長府の黒門に山県のおばあさんがいる。そこへ兄弟で、梅の実を貰いに行くのが、うれしかった。壇之浦あたりから、海にそって歩く。流れを見、汽船を見、釣舟を見、釣人を見た。対岸の田ノ浦は大きい倉庫が7つかあるだけで何もなかった。何はともあれ楽しかった。その頃、前田の発電所の工事が進められていた。

長府に豊浦中学（現豊浦高校）ができたのは大昔である。

馬関ん子は、片道8kmを歩いて、朝夕通った。友人に感想を聞くと、雨の日は困った。風がひどくて、雨傘は使えない。

朝日に輝き明けゆく海は、夕映の眺めは、どうだと云っても、印象にない。

潮の干満は、自然のものさ。

つらさが九分という顔で、楽しさ一分の表情すらない。

この道は、通学のミチだと思われる。

然し5年間の朝夕は、本人の意識に上らなかったが、^道道であった。

縄文期は長府より、一ノ宮、綾羅木の線に遺跡はある。海峡に面する所は、断崖が多く用事が無かった、と思われる。

現代人は開発と埋立てで、下関市の街を作り利用している。そして夜景は、東洋に冠たり、と宣伝する。

現代科学は、潮流を乗り切った。

潮流利用による発電は、試験管的成功である。実用となると今一步の感がある。